

『鍾山即事』 王安石

唐宋八大家の一人で政治家でもあった王安石が、晩年隠棲していた鍾山で高尚な情趣を詠じた名作である。

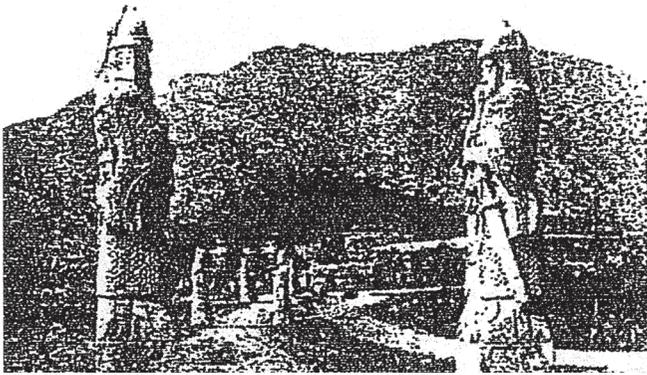
鍾山即事 王安石

澗水無聲繞竹流 澗水聲無く竹を繞つて流る
 竹西花草露春柔 竹西の花草春柔を露す
 茅簷相對坐終日 茅簷相對して坐すること終日
 一鳥不啼山更幽 一鳥啼かず山更に幽なり

字解

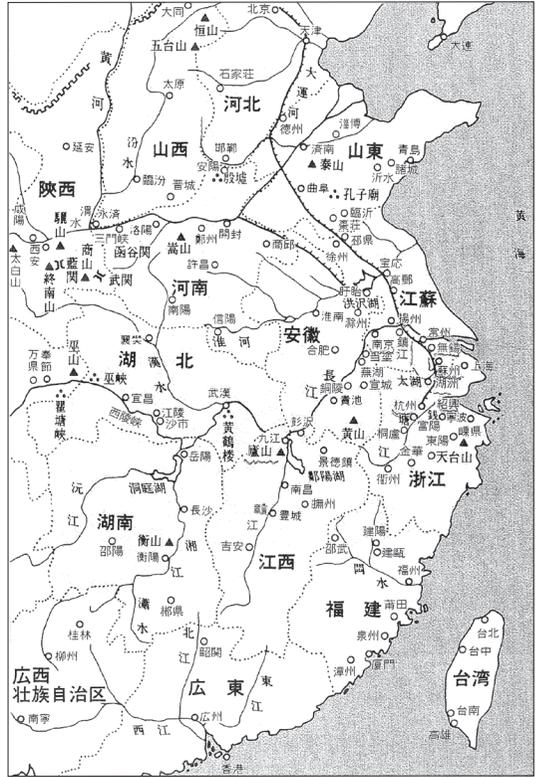
鍾山即事Ⅱ単に「鍾山」とのみ題している本もある。「鍾山」は、今の江蘇省南京の東北郊外にある名山で蔣山とも北山とも紫金山ともいう。作者は晩年、その山と市街の中間に隠棲していた。「即事」はその場、その時の眼前の景色や様子を詩に作ることに。この山は低山ながらも非常に広い裾野を持ち山域いっぱい広がる森林は、大都市南京のオアシス的存在になっている。旧称である「南京鍾山」の名で、中国の国家級風景区にも指定されている。

澗水Ⅱ谷川の水
 春柔Ⅱ若草のやわらかさ
 露Ⅱあらわす
 別に「弄」としている本もある
 の軒下
 相對Ⅱ鍾山と相對する



十三人陵石人 南京郊外

山陵は明の太祖の孝陵、ほかに呉の大帝、晋の元帝・明帝・成帝・哀帝・宋の武帝・文帝等の諸陵がある。後方の鍾山は、齋の孔稚圭の草堂がある。



意 解

▽鍾山の見たままを詠う

谷川の水は音もなく、竹林を繞って流れている。その竹林の西には、花や草が、天の光のもとに如何にも春らしい気分を表している。

自分は茅葺の軒の下で、一日中鍾山と向き合って座って居ると、鳥の鳴き声一つなく山は一層静かである。

鑑 賞

▽承句

「春柔」の語は、王安石以前の詩には出てこない。ただ

歴史書の中に用例がある。南北朝の北魏の歴史書に「仰いで祖業を歌い、俯して春柔を欣ぶ」とある。春の穏やかさ、春の恵み（ここでは天子の恵み、平和な世の有り難さをいう）に用いられている。この語によって山荘は柔らかに包まれ閑けさにのんびりした明るさが加わった。

▽転句

「相對して」は作者が、茅葺の家で人と相對すると解するか、茅葺の家と相對するかなどの解釈も可能であるが、鍾山に向かい合っているととる。

▽結句

この詩のポイントは結句にある。

※一つは 六朝梁の王籍の詩に「若耶溪に入る」というのがある。（若耶溪は紹興の近くにある名勝）その二句に

蟬噪林逾靜 蟬噪しゆうして林逾靜に

鳥鳴山更幽 鳥鳴いて山更に幽なり

の句がある。これは蟬や鳥の声を点出する事により、却って林や山の静けさを際立たせたる効果を狙った手法として、よく知られている。王安石はそれを更に捻って「一鳥啼かず山更に幽なり」とした。巧妙に逆用した句として古来有名である。ちなみに漢詩通の芭蕉（一六四四～一六九四）は王籍の「鳥鳴山更幽」の句を想い、王安石が捨てた「蟬噪林逾靜」の着想を得て次の俳文及び俳句を残している。

山形領に立石寺という山寺あり、(中略) 岩上の院扉を閉ぢて物の音聞こえず (中略) 佳景寂寞として心清み行くのみ覚ゆ

閑かさや 岩にしみいる 蟬の声 (奥の細道より)

良寛にも (一七五八〜一八三一) 『風定花尚落 鳥鳴山更幽 (風定まりて花尚落ち 鳥鳴きて山更に幽なり)』の句があり、王籍の詩をまねている。

※二つめは「幽」の解釈として

この鍾山の麓の山荘の有り様を幽ととらえる。それはとりも直さず自分の生き方、心持ちの有りようを表すものである。奥深く静かな、俗世間の煩わしさとは無縁の世界を品の良い穏やかな風趣としてを表現している。王安石晩年の作といえる。

補足① 王安石は、古人の詩句を選んで繋ぎ合わせ集句の詩を作るのが得意であったといわれている。梁の謝貞が八歳の時の詩に、「花猶舞」とあったものを、王安石が「花猶落」に改め、そのため詩が一層巧みになったという事が、宋の許顛の「彦周詩話」に記されている。又、梁の王籍の「鳥鳴いて山更に幽なり」の句に、謝貞の「風定つて花猶落つ」の句を並べて「風定花尚落・鳥鳴山更幽」と一聯にまとめ、面白く趣深い作品に仕上げているのは、甚だ巧妙である。

補足② 鍾山即事に続く、季節の山荘の閑和を詠った詩。

初夏即時 王安石

石梁茅屋有灣碕 石梁茅屋 灣碕有り

流水濺濺度兩陂 流水濺濺として 兩陂に渡る

晴日暖風生麥氣 晴日暖風 麥氣を生じ

綠陰幽草勝花時 綠陰幽草 花時に勝る

石の橋、茅葺の家、曲がりくねった堤の岸边、水はさらさらと二つの堤の間を流れ、晴れた日差しと暖かい風の中、麦の香が漂う。

緑の木陰、ひそかに茂った草は花の季節よりも遙かに美しい。

王安石 一〇二一—一〇八六

▽革新政治家であった王安石

北宋の詩人、文章家、政治家、政治家。唐宋八大家の一人。撫州臨川 (江西省) の人。字

は介甫、半山と号し、臨

川先生とも呼ばれた。幼

い頃から文章を作る事が

素早く、若い時から好ん

で本を読んだ。記憶力は

抜群で一度目を通したも



王安石肖像



神宗

のは生涯忘れなかつたという。仁宗第四代皇帝の慶暦二年二十二歳で進士に合格。神宗第六代皇帝から信頼を得て宰相に任じられ、新法を実施して財政の建て直し等実績をあげたが、保守派の反撃を受け、元豊八年神宗が崩じ保守派が政権を握り新法はことごとく廃止された。政治家としては「名官僚」と言われた。王安石は元豊二年隠棲していた鍾山で新法廃止の報に接した。その翌年元祐元年失意の中六十六歳の生涯を終えた。

▽文章家 唐宋八大家の一人であった王安石

南宋の頃から、韓愈、柳宗元、蘇軾の評価は揺るぎなかったが、明の初めごろから八人に定まり、明代後期、茅坤が「唐宋八大家文鈔百六十四卷・文読本三十卷」を編し、和刻本が何種類も出版されるほどわが国で流布した。

また王安石は杜甫の影響を受け、その詩風は雅麗と評される。特に絶句においては、北宋第一とされる。叙事詩(古詩)にも傑作が多い。「王荊公詩」五十卷「王半山詩箋註」などは天保七年刊の官版もあり日本の内閣文庫に蔵されている。

唐宋八大家

中国、散文に於ける唐代・宋代のもっとも優れた作家八人の総称

- 唐代 韓愈、柳宗元
- 宋代 歐陽修、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石

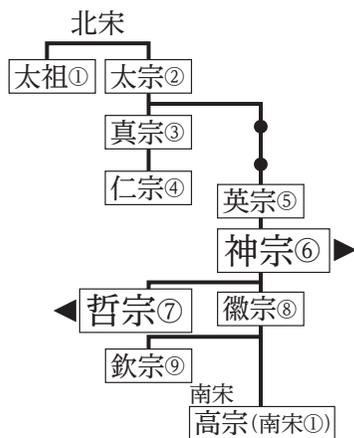


参考

- 宋 北宋（九六〇～一二二七）二六八年間 九代
- 南宋（一二二七～一二七九）一五〇年間 七代



太宗(宋) 台北故宮博物館蔵





鐘山・王安石の故居（南京）

王安石を宰相に起用して、新法による改革を行ったが、混乱を引き起こした「元祐更化」で王安石の新法を否定したが「紹聖紹述」では復活させた。